

させたいと思っています。さらに、行政にはどうか帰国外国人特別措置の来日5年間まで延長をお願いしたい気持ちです。彼のような意欲も能力もある子どもが、日本語能力が十分ではないという理由で進みたい進路に進めないとしたら残念でなりません。そして、さらに頑張って進学を果たした外国籍の高校生への日本語の配慮も同時にぜひ行って欲しいと思います。他県では高校入試において「帰国外国人枠」があるところ、また、高校進学後も日本語の支援がある高校もあると聞きます。努力して高校進学を果たした生徒に対して、本県においても小中学校に引き続き日本語の支援が望まれるところです。

HANDS進学ガイダンス、10年の歩み…本当にいろいろなことがありましたが、振り返ってみると「できるだけ早く情報を提供してあげたい」と強く思っています。中学生になってからの方が確かに進路を見据えてのより具体的な「情報提供」になりますが、日本人家庭に対して圧倒的に高等学校についての情報をもっていないのが現状です。できれば小学生のうちにガイダンスに参加して親子で日本の教育制度について知識をもつことで、その時々何をすればよいのか、どう頑張ればよいのかを考えるきっかけになると思います。最後に、この「多言語による進学ガイダンス」は毎回の参加者アンケートで高い満足度を得ています。今後も様々な機関や人々のご理解とご協力のもと、これからも続いていくことを願っております。

### 進路指導の現場から思う、ハンズの取り組み10年

栃木県中学校教育研究会 キャリア教育・進路指導部会 研究委員 山中 亮

宇都宮大学国際学部の「多言語による高校進学ガイダンス」の協力スタッフにと、声をかけられてから10年も過ぎました。それまでも、日本に来て学習に苦しみながらも、懸命に生きようとする外国人・日系人と多少は接する機会がありました。本人よりもそれ以上に日本語が分からない保護者との対応は難しいものでした。学校生活では、友人も作れ日本の生活になじんできても、卒業となると高校進学問題、就職問題のハードルは高いのです。

今、中学校の現場では多種多様な問題に追われ、多忙の一言です。生徒の将来につながる「キャリア能力」の育成が急務であると言われ、自分は関東や全国での研修等に参加し、その必要性を大きく感じ、栃木県内での研究大会の主催者側になり、20年近く携わってきました。しかしその実践となると、どうでしょうか。校内でその余裕があ

るでしょうか。別に目新しいことをやるわけではないのに、「キャリア教育」は二の次です。友人トラブルの生徒指導や保護者対応、前年どおりで進む学校行事の準備。本当に伸ばしたい、伸ばすべき子どもたちの力は、人それぞれです。どう生きるかは、自分で考え、自分で求め、もっと自由があるのだけれど、一斉指導の中でどれだけ一人一人に寄り添えるのでしょうか。やっていないわけではないが、十分とは言えない。もっと、子どもたちにいろいろな生き方、考え方があることを伝えたい。まだ見つからない自分の力を知り手がかりを探すような取り組みをしたい。——今年3月定年を迎え、やり残したことがばかり思い浮かびます。

さて、ハンズの取り組みもまた、学校現場からすると、多忙の中十分ではない「キャリア教育」を補完する大きなものでした。出会った外国人の子どもたちは、ほとんどが日本での生活を希望していました。日本と母国の間での夢を語れる子。まだ日本での生活がままならない子。「多言語による高校進学ガイダンス」は、そんな子どもたちの話を聞き、スタッフでアドバイスをするだけの機会ですが、本気で応援する気持ちを伝えてやりたかった。表情が少しでも明るくなって会場を出て行く姿を見ることしかできなかった。その後、どうなったのでしょうか。ガイダンスへの参加者は、県内の中学生のほんの一部に過ぎないことも事実です。しかし、このような機会を作ることで、学校現場での進路指導(キャリア教育)を立派に補完していることが重要なのです。これから、このような取り組みが、各地で開かれ、身近な相談の場として広がること。学校現場との相互理解が深まること。これまでに果たしてきた実績も大きいですが、今後の活動への期待が大きい取り組みだと改めて思います。

### フィリピン語の通訳者として

フィリピン語の翻訳・通訳者 市川恭治

私は京都で生まれ、大学は静岡大学で農学部を卒業しました。大学卒業後、上智大学でフィリピン語を学びました。現在、環境問題のコンサルタントとして、フィリピンの環境にかかわりながら、フィリピン文化研究会を主宰し、アジアからの出稼ぎ労働者支援などの、NGO活動にも関わっています。

HANDSとの出会いは2010年度で、以来、「多言語による高校進学ガイダンス」でずっとフィリピン語の通訳を務めてきました。フィリピンやフィリピン語とは、通訳・翻訳者などを通じて、HANDSと出会う前から、長年関わってきました。HANDSは

『中学教科単語帳—日本語⇄フィリピン語』という立派な学習辞典を刊行しましたが、私はこれまで、『日本語—フィリピン語実用辞典』(1994年)、『日本語—フィリピン語両用会話集—出会い・プロポーズ編』(2002年)、『日本語—フィリピン語両用会話集—結婚・生活編』(2005年)、『フィリピン語—日本語実用辞典』(2006年)の4冊を出版しました。

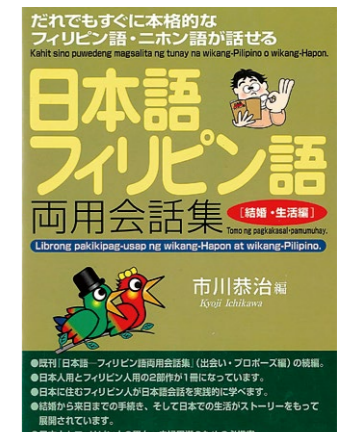
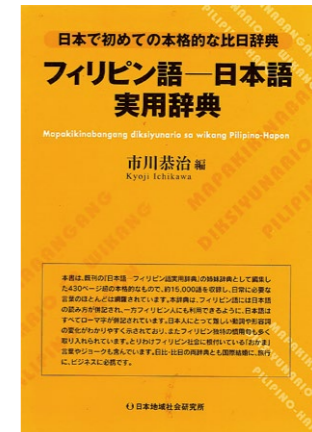
最初の辞典である『日本語—フィリピン語辞典』は、現代フィリピンとの交流を深めるために、日常会話に必要な9000語の日本語をフィリピン語(タガログ語)に訳し、文法なども解説したものです。日本人用の辞書ですが、少し仮名や漢字が分かるフィリピン人がもっと日本語を覚えるためにも使えるように工夫したものです。その続編といえる『日本語—フィリピン語—日本語実用辞典』は、430ページ超の本格的なもので、約15000語を収録し、日常に必要な言葉のほとんどは網羅されています。本辞典は、フィリピン語には日本語の読み方が併記され、一方フィリピン人にも利用できるように、日本語はすべてローマ字が併記されています。日本人にとって難しい動詞や形容詞の変化がわかりやすく示されており、またフィリピン独特の慣用句も多く取り入れられています。日比・比日の両辞典とも国際結婚に、旅行に、ビジネスに必携です。HANDSのフィリピン語単語帳で勉強した児童生徒が大人になったら是非勉強に利用してほしいと思っています。

宇都宮市内の小中学校に在籍するフィリピン児童生徒への学習支援(日本語指導)にも日本語指導員として10年以上関わってきました。現在は、コロナの影響でキャンセルになった案件もあり、1人のフィリピン人小学生の指導をしています。長年の経験からすると、統計的には確認していませんが、高校進学できない、あるいは高校入学できても中途退学してしまうフィリピン人生徒は他の国籍・母語の外国人生徒よりも多い気がします。だからなのか、宇都宮大学国際学部のフィリピンルーツの学生に会うと、よくここまで来れたと嬉しくなります。厳しい状況に直面しているフィリピン児童生徒と出会ってきたことが、HANDSに関わってきた大きな要因ともいえます。

現在、日本で暮らしているフィリピン人は、中国、韓国、ベトナムに次いで多く、約28万人います。栃木県では、5千人を超えるフィリピン人がいます。今後、もっと増えていくのではないのでしょうか。

私自身教育支援に関わってきたことから特に感じているのかもしれませんが、HANDSのような教育支援の活動は、ある意味地味で、顕著な成果がすぐに見えるような形で出てくるわけではないものです。そのような活動を地道に10年進めてきたことは実は凄いことに関係者に敬意を表したいと思えますし、その一躍を担ってきたことを感慨深く思います。今後

とも、フィリピンとの交流、未来を担う子どもたちの教育支援に取り組んでいきたいと考えています。



### ガイダンス体験レポート

#### 夢をもち、人生は自分次第!

豊田市立保見中学校教員 伊木 ロドリゴ

私の名前は、ロドリゴです。ブラジルで生まれました。27才です。愛知県の豊田に住んでいます。その豊田市で英語の先生をしています。

10才で日本にきました。その時、日本語は全くわかりませんでした。私は、日本語の能力がゼロだったので、みんなから「ばか」とよく言われていました。

先ほどの高校進学ガイダンスの話を、小中学生のみなさん、興味を持って聞いていましたか?自分たちがこれが欲しいな、これがないと困るな、と思ったら、自分で本気になって選ぶと思います。だから、この高校ってどんな部活があるの?その高校に行ったら、どんな勉強ができるの?ということ自分で考えると、楽しそうな学校を選べるんじゃないかな。

僕のお父さんがある日、汚い作業着を着て帰ってきて、「ロドリゴ、お前もこうなりたいのか。汚い作業着を着て、仕事したいのか?」と言いました。

僕は、「いやだ」と答えました。「じゃあ、お前の今の仕事は何だ?」と言われ、「勉強かな」と答えました。学校に行くと、勉強する一番の理由は、今学校に行くと学ぶことがあとでそれが君たちのご飯になる、君たちが欲しいカッコいいバイクになる、車になる、フットサル場付きの家になるから、だと思います。

仕事をしていると単調な毎日だな、仕事に行きたくないな、と思う日もあります。でも、学校に行くと、部活ではサッカーを、授業では英語を教えていて楽しいですし、学活の時